

現代武道の概念と国際性の問題点

須 郷 智 (中央大学)

1. 20世紀後半以降、わが国の武道は国際的に顕著な普及をみるに至り、用具などの問題から国際的な発展が困難視されていた剣道も、組織化され世界的な競技会が開催されるようになった。このような背景には、敗戦後、武道の古い封建的な体質、あるいは軍国主義的な色彩を一新し、平和主義のもとに武道の近代化を計った武道愛好家たちの努力があり、これらが一因となってわが国の武道は、運動文化として国際的に理解を深めるに至ったといえるのである。たとえば、競技者人口、愛好者、組織率などにおいて、短年月のうちに驚異的な伸展をみた柔道、空手、合気道などがその代表的な種目であり、いまや武道の国際化は、看過できない情況にある。

このような現象は、外国人がわが国の武道そのものの活動に、憧憬的に魅了されるという理由にも起因するであろうが、武道が近代化、あるいはスポーツ化したことによって民族的なものを超え、外国人にも受け容れられるようになった結果であるとする捉え方もある。さらに、その近代化、スポーツ化した武道によって、国際親善として平和運動に貢献することが可能であるとする考え方もある。しかしながら、このような一面的な捉え方、考え方は、いわば表面的、短絡的な讚美に過ぎないとする危惧もないではない。一方、武道をスポーツ化して国際化することは、武道の本質をゆがめるものであるとして、伝統的な観念に固執し、わが国古来の武道のままでおし進めようとする考え方もあり、さらに、わが国の武道はわが国独自の民族文化財であって、所詮、他国民にその深奥に流れる精神徳目を理解させることはできないとして、国際化に反対する見解もある。もっとも、武道は新憲法の平和、自由、平等などの思想に逆行

する活動であるとして、武道の大衆化に全面的に反対し、武道の復活を否定する立場さえもある。このように武道に対し、さまざまな批判があるということは、武道にそれだけ多くの問題点が内包されているということであり、現代における武道観が未成熟であることを意味している。したがって新しく模索される武道観はこれらの批判に対応しうる理論構成が必要であり、そのうえで国際化する武道が展望されなければならない。すなわち、わが国の伝統的、民族的、風土的な地盤を背景に、武術を習得するプロセスにおいて醸成した精神徳目＝倫理によって支えられ、継承されてきた武道が、今後の人間や、社会に貢献するにはいかにあるべきかを問い直すことが、今後の武道観を模索する課題であるといえよう。ここではこの課題に迫る手法として、主として剣道を中心に問題点を浮き彫りにし、新しい武道観のための試論としたい。

II 武道の性格内容が、社会、風土、習慣などの歴史的な経緯によって形成されたということは自明であろう。すなわち、剣道においては鎌倉期以降から吉野朝時代に武士階級が出現し、彼らの主要な武器が日本刀であったことにより、敵を斬り倒すという目的のため剣術を練磨した。また、戦闘体験を通して得た新しい技術は、近親者や同志の者たちに伝授され、やがて体系化していわゆる諸派、諸流の剣術があみ出され、それぞれの流祖によって理論づけが定立した。さらに、剣術に対する超越性は個別的、差別的な個への執着を断つ神秘性に求められ、悟りと呼ばれる無我の境地に到達するプロセスが追求されたが、その理念は禅の思想に求められた。ついで徳川時代に至り、剣術の超越性が支配者の正統性に連けいし、その正統性には儒教における有徳の思想が求められた。このように剣術

を戦技として展開した背景に禅の教義や儒学の思想が影響を及ぼすに至り、その後武技の修業は、武士の精神養成をも要求するようになり、敵を斬るという剣術は武士教育を目的とする教育的な意義を付帯し、武技は武芸として特徴的な武士道を醸成した。このような武士道は、その後わが国を大きく変革させた明治維新によって、近代化の波に洗われることになる。しかし、その近代化や西欧化に反発し、日本古来の伝統を固執しようとする国粹思想が生まれ、それらは時勢に乗じた軍国主義と迎合し、軍国主義的な武道観を打ちたてる結果となった。

以上のような封建的社会構造を背景に形成をみた旧武道観は、新憲法が唱導する民主主義や平和主義とは根本的に矛盾対立する思想であり、たとえ武道がスポーツ化し、大衆化したとしても、旧態依然の概念が払拭されない限り、武道の現代化は形骸化する危険を伴う。すなわち、旧武道観は、新憲法を基盤とする新武道観に転換を迫られているのであり、平和思想に徹した新武道観が確立したとき、はじめて国際社会や現代社会に受け容れられる武道観が成立する。

Ⅲ 以上の根本概念を基底とすれば、武道はその実践活動を通して人間に身体的、精神的な快感を与えるものであり、個々の人間がもつ可能性を、より開発促進する身体運動であると捉えられ、ここに武道を実践する現代的な意義が成立することになる。そのアプローチとして、

先ず、武道の実践が個人の身心両面に及ぼす影響を分析し、長所と欠点とを抽出しなければならない。そして、それらに検討が加えられ、科学性に立脚した方法によって武道が展望されなければならないであろう。また、古くて長い歴史的な過程に醸成した武道に関するイデオロギーを、武道の原形として受けとめ、これを醇化する方向が模索されなければならない。それは、旧武道観に内省が加えられ、今後の人間、社会に役立つ武道が創出されることを意味し、学問的な見地からの追求を意味する。このような視野にたてば、武道が内包する競技性、遊戯性、活潑な大筋活動など、スポーツに連係する性格が析出され、武道がスポーツか否かという議論において、二者択一を迫るというような考え方は論理性の追求が欠如している。また、「武道は礼儀を重んず」とか、「武道は礼に始まり礼に終る」というような観念も上・下、タテの人間関係に生じた階層主義に基軸を据えた観念であってはならない。つまり、武道を通して得られる人間関係は相互理解であり、上、下の社会的な秩序、外側からの強制というような枠ぐみから離れ、人間尊重の理念に支えられる礼が強調されなければならない。したがって、武道が権威、独善、排他などを捨象し、国際的に拡大したとき、その普遍性はわが国の伝統的な武道をヒューマニズムに支えられた武道として、創出するのである。